

2013（平成 25）年度 京都大学 入試問題 文系 第 2 問 解答例

問一

かつての旅では、家を出るまで、往路の車中、宿を出る際、家へ向かう復路の各々において、日常の移動の際とは異なる感傷が生じ、様々な心情の強弱の起伏が大きいということ。

問二

家内の様子は、旅の前後で何の違いもないが、旅の感傷に充たされ、言い難い懐かしさに往きより興奮している旅帰りの者には、不活発で不愉快なものに見え、出迎え方に何の気遣いもなく、排除されている感じを抱かされたということ。

問三

父親は、かつて旅帰りの者を迎える気遣いの不手際を不快に思ってとがめた際に、旅帰りの感など分かるはずがないと反論した娘が、自ら同様の旅帰りを経験し、父親の言葉を思い出して理解を表すという予想が実現し、満足したから。

*父親は、筆者が「思はず父の顔を窺った」という行動・表情を「待つてみた眼で」いたのであり、それを正確に置換説明できているかどうかである。

問四

「私」は、旅帰りの父親を迎える特別な気遣いとして、出発時と同様の掃除や整頓だけではなく、洗濯してこしらえなおした座蒲団と焙じて匂い立つ番茶を出すことで、特別な金をかけずとも宿より上のもてなしができると思ったから。

問五

「私」は、旅帰りへの気遣いを父親が理解していると思い、褒めないのもまだ不足なのだろうと思ったが、後日、座蒲団と番茶は多少考えたと言うと、家内の日常への配慮は当然で、考えたというほどではないと非難された。気遣いへの理解はうれしいが、労いの言葉も欲しかったと受け止めている。

*本文最終センテンスの意味をよく考えて、それ（「一つも残さず見つけて犒ほうとして、捜しまなこになるのである」）を反映させること。